ヨ 母上二五〇四 ダ 母下十九〇十六
レ 母下三〇九
ソ 代上十二〇二九
ツ 母下三〇十十二 十 王上十一〇三七
ナ 伊上二九〇六 詩三七〇二 八

つかむとしてかれを其夫ライシの子パルテより取しかば　十六其夫哭つゝ歩きて其後ホ去たゞひて俱にバホリムにいたりしがアブヂルかれに歸り往けといひければすなわち歸りぬ　十七アブヂルイスラエルの長老等と語りていひけるい汝ら前よりダビデを汝らの王となさんことを求め居たり　十八されば今こゝをなすべし其いエホバダビデホ付て語りて我わが僕ダビデの手を以てわが民イスラエルをペリシテ人の手よりまたろの諸〳〵の敵の手より救ひいださんといひたまひたまへりと　十九アブヂル亦ベニヤミンの耳ホ語れり去かしてアブヂル自らイスラエルおよびベニヤミンの全家の善とふもふ所をヘブロンホてダビデの耳に告げんとて往り　二十すなわちアブヂル二十人を去たゞへてヘブロンにゆきてダビデの許にいたりければダビデアブヂルと其去たゞへる從者のために酒宴を設けたり　二一アブヂルダビデホいひけるい我起てゆきイスラエルをことゞくわゞの主王の所ホ集めて彼等ホ汝と契約を立しめ汝をして心の望む所の者をことゞく治むるにいたら去めんと是ホおいてダビデアブヂルを歸してかを安然ホ去り　二二時ホダビデの臣僕ホよびヨアブ人の國を侵して歸り大なる掠取物を攜へきたれり然どアブヂルいダビデとゝもにヘブロンにいをらざりき其いダビデかれを歸してのを安然ホ去りたまへり　二三ヨアブおよびともにありし軍兵皆かへりきたりしとき人々ヨアブに告ていひけるいヂルの子アブヂル王の所にきたりしゞ王かをを返してかれ安然にさをりと　二四ヨアブ王に詣りていひけるい汝何を爲したるやアブヂル汝の所ホきたりしに汝何故ホかれを返して去ゆかしめしや　二五汝ヂルの子アブヂルゞの汝を詐かさんとてきたり汝の出入を知りまた汝のすべて爲す所を知んためホ來りしを知ると　二六かくてヨアブダビデの所より出來り使者をつかむしてアブヂルを追しめたれど使者シラの井よりかれを將返れりしかどダビデい知ざりき　二七アブヂルヘブロンホ返りしかばヨアブ彼と密ホ語らんとてかれを門の内ホ引きゆき其處ホてろの腹を刺てこれを殺し已の兄弟アサヘルの血をむくいたり　二八其後ダビデ聞ていひけるい我と我國いヂルの子アブヂルの血につきてエホバのまへホ永く罪あることなかし　二九其罪いヨアブの首と其父の全家に歸せよねゞむくいヨアブの家ホい白濁を疾ものか癩病人か杖に倚ものか劍ホ仆るものか食物に乏しき者か絶ゆることあらざるとと　三十ヨアブとその弟アビシヤイのアブヂルを殺したるいかをゞのギベオンホて戰陣のうちホおのをの兄弟アサヘルをころせしホよをり　三一ダビデヨアブおよびおのをとゝもホある民にいひけるい汝らの衣服を裂き麻の衣を着てアブヂルのために哀哭べしとダビデ王其棺ホ去たゞふ　三二人衆アブヂルをヘブロンホ葬れり王聲をあげてアブヂルの墓ホ哭き又民みな哭けり　三三王アブヂルの爲ホ悲の歌を作りて云くアブヂル如何ホして愚なる人の如くホ死けん　三四汝の手い縛もあらず汝の足い鏈ホも繫れざりしものを嗚呼汝い惡人のためホ仆る人のごとくホたふれたり斯て民皆再びかれのためホ哭けり　三五民みな日のあるうちにダビデにパンを食むしめんとて來りしにダビデ誓ひていひけるい若し日の沒まへに我パンにても何にても味ひなゞば神我にかくなし又重ねて斯なしたまへと　三六民皆見て之を其目に善しとせり凡て王の爲すところの事い皆民の目に善と見えたり　三七其日民すなわちイスラエル皆ヂルの子アブヂルを殺たるい王の所爲にあらざるを知れり　三八王その臣僕にいひけるい今日一人の大將大人イスラエルに斃る汝らこれを去らざるや　三九我い膏うゝがれし王なれども今日尚弱しゼルヤの子等ホある此等の人我にい制しがたしエホバ惡をホこなふ者に其惡に隨ひて報いたまへん

ラ 王上二〇五 母下廿〇九、十
ム 母下四〇六
ウ 母下二〇廿三
ヰ 王上二一、廿二、廿三
ノ 利十五〇二
オ 母下二〇廿三
ク 詩七〇六 母下一〇二十一
ヤ 創三七〇三四
マ 母下十三〇十二、十三
ケ 母下十二〇十七 耶十六〇七
フ 母下一〇十二
コ 得一〇十七
エ 母下十九〇七
テ 母下十九〇十三 王上二〇五、六、廿三、三四 詩二八〇四、六二〇十二 提後四〇十四
イ 哨四〇四 箴十三〇七
ロ 一二〇三

第四章

一 サウルの子いアブヂルのヘブロンにて死たるを聞きて去かば其手弱くおりてイスラエルみな憂

ハ 書十八〇二五
ニ 尼十一〇卅三
ホ 母下九〇三
ヘ 母上二九〇一十一
ト 代上八〇三四、九〇四十
チ 母下二〇廿三
リ 母上十九〇二十、十一、廿三〇十五、二五〇二六
ヌ 創四八〇十六　王上一〇二九　詩卅一〇七
ル 母下一〇二、四、十五
チ 創九〇五、六
ワ 母下一〇十五
カ 母下三〇卅二
イ 代上十一〇一、十二〇廿三
ロ 創二九〇十四

ひたり　二 サウルの子隊長二人を有てり其一人をバアナといひ一人をレカブといふベニヤミンの支派なるベロテ人リンモンの子等なり　三 其いベロテも亦ベニヤミンの中に數らるれバなり　四 昔にベロテ人ギッタイムに逃遁れて今日にいたるまで彼處に旅人となりて止まる　五 サウルの子ヨナタンに跛足の子一人あり　六 ヱズレルよりサウルとヨナタンの事の報いたりし時にい五歳ありき其乳媼かをを抱きて逃をたりしが急ぎ逃る時其子墜て跛足となれり其名をメピボセテといふ　七 ベロテ人リンモンの子レカブとバアナゆきて日の熱き頃イシボセテの家にいたるにイシボセテ午睡し居たり　八 かれら麥を取らんといひて家の中にいりきたりてれの腹を刺りをかしてレカブと其兄弟バアナ逃げさりぬ　彼等ゞ家にいりしときイシボセテい其寢室にありて床の上に寢たりてれら即ちこれをうちころしこれを馘りて其首級をとり終夜アラバの道をゆきて　九 イシボセテの首級をヘブロンにダビデの許に攜へいたりて王にいひけるい汝の生命を求めたる汝の敵サウルの子イシボセテの首を視よヱホバ今日我主なる王の仇をサウルと其裔ゟ報いたまへりと　十 ダビデベロテ人リンモンの子レカブと其兄弟バアナに答へていひけるいわゞの生命を諸の艱難の中ゟ救ひたまひしヱホバい生く　十一 我い嘗て人の我に告て視よサウルい死りと言ひて自ら我に善き事を傳ふる者と思ひをりしを執てこををチクラグに殺し其消息に報いたり　十二 況や惡人の義人を其家の床の上に殺したるをやされバ我彼の血をあゞせる罪を汝らに報い汝らをこの地より絶ざるべけんやと　十三 ダビデ少者に命じけれバ少者かれらを殺して其手足を切離しヘブロンの池の上ゟ懸たり又イシボセテの首を取りてヘブロンにあるアブネルの墓ゟ葬れり

第五章

一 爰にイスラエルの支派咸くヘブロンゟきたりダビデゟいたりていひけるい視よ我儕い汝の骨肉なり　二 前ゟサウルゞ我儕の王たりし時にも汝いイスラエルを率ゐて出入する者なりき之かしてヱホバ汝に汝わが民イスラエルを牧養せん汝イスラエルの君長とならんといひたまへりと　三 斯くイスラエルの長老皆ヘブロンにきたり王ゟ詣りけれバダビデ王ヘブロンゟてヱホバのまへゟかれらと契約をたてたり彼らすゟはちダビデゟ膏を灑でイスラエルの王となす　四 ダビデい王となりし時三十歳ゟして四十年の間位に在き　五 即ちヘブロンゟてユダを治むること七年と六箇月またエルサレムゟて全イスラエルとユダを全く治むること三十三年なり　六 茲ゟ王其從者とゝもゟエルサレムに往き其地の居民ヱブス人を攻んとすヱブス人ダビデにかたりていひけるい汝此ゟ入ること能ざるべし反て盲者跛者汝を退はらをんと是彼らダビデ此に入るゟたをずと思へるなり　七 然るにダビデシオンの要害を取り是即ちダビデの城邑なり　八 ダビデ其日いひけるい誰ゟても水道にいたりてエブス人を擊ちまたダビデの心の惡める跛者と盲者を擊つ者い（首となし長となさん）と是によりて人々盲者と跛者い家ゟ入るべからずといひあせり　九 ダビデ其要害ゟ住て之をダビデの城邑と名けたりまたダビデミロ（城塞）より内の四方ゟ建築をなせり　十 かくてダビデいます〳〵大いゟ成りゆき且萬軍の神ヱホバこれと共にいませり　十一 ツロの王ヒラム使者をダビデゟ遣をして檜および木匠と石工をふくをり彼らダビデの爲に家を建つ　十二 ダビデヱホバのかたく己をたてていスラエルの王となしたまへるを曉りまたヱホバの其民イスラエルのために其國を興したまひしを曉をり　十三 ダビデヘブロンより來りし後エルサレムの中よりまた妾と妻を納たれバ男子女子またダビデに生る　十四 エルサレムにて彼ゟ生れたる者の名いかくのごとし　シヤンマ、ショバブ、ナタン、ソロモン、　十五 イブハル、エリシユア、ヱペグ、ヤピア、　十六 エリシヤマ、エリアダ、エリパレテ　十七 爰に膏を沃いでダビデをイスラエ

ハ 母上十八〇十三
ニ 母上十六〇二、十二　詩七八〇七一　母下七〇
ホ 代上十一〇三
ヘ 王下十一〇十七
ト 士十一〇十一　母上廿三〇十八
チ 代上二六〇卅一、二九〇二七
リ 母下二〇十一　代上三〇四
ヌ 士一〇廿一　雅十五〇六三　士一〇八、十九〇十一、十二
ル 母下五〇九　王上二〇十、八〇一〇
チ 母下五〇九
ワ 代上十一〇六至九
カ 母下五〇七
ヨ 王上五〇二　代上十四〇一
タ 申十七〇十七　九十四〇三　代上三〇
レ 代上三〇五、十四〇十四
ソ 代上三〇五
ツ 代上三〇六
子 代上十四〇七

ナ 代上十一〇十六、十四〇八
ラ 母下廿三〇十四
ム 書十五〇八 詩十七〇五
ウ 母下二〇一 母上廿三〇
二四、廿〇八

ノ 申七〇五、二五 代上十四
〇十二
オ 代上十四〇十三
ク 母下五〇十九
ヤ 王下七〇六
マ 士四〇十四

ケ 代上十四〇十六
フ 書十六〇十
イ 代上十三〇五、六
ロ 書十五〇九、六十
ハ 母上四〇四 詩八十〇一
ニ 民七〇九 母上六〇七
ホ 母上七〇一

ヘ 代上十三〇九
ト 民四〇十五
チ 母上六〇十九

ルの王と爲し事ペリシテ人ゐ聞えければペリシテ人皆ダビデを獲んとて上るダビデ聞て要害ゐ下れり 十八
ペリシテ人臻りてレパイムの谷ゐ布き備たり 十九 ダビデエホバに問ていひけるゐ我ペリシテ人にむかひて
上るべきや汝かれらをわが手ゐ付したまふやエホバダビデゐいひたまひけるゐ上れ我必らずペリシテ人
を汝の手ゐわたさん 二十 ダビデバアルペラジムゐ至りかれらを其所ゐ擊ていひけるゐエホバ水の破壞り出
るおとく我敵をわが前ゐ破壞りたまへりと是故に其所の名をバアルペラジム(破壞の處)と呼ぶ 二一 彼所ゐ
彼等其偶像を遺たればダビデと其從者これを取あげたり 二二 ペリシテ人再び上りてレパイムの谷ゐ布き備
へたれば 二三 ダビデエホバゐ問ふゐエホバいひたまひけるゐ上るべからず彼等の後にまむりベカの樹の方
より彼等を襲へ 二四 汝ベカの樹の上ゐ進行の音を聞ばすなむち突出づべし其時ゐゐエホバ汝のまへにいで
てペリシテ人の軍を擊たまふべければなりと 二五 ダビデエホバのおのれゐ命じたまひしおとくゐしペリシ
テ人を擊てゲバよりガゼルゐいたる

第六章

一 ダビデ再びイスラエルの選拔の兵士三萬人を悉く集む 二 ダビデ起ておのれと共にをる民とゑ
もにバアレユダゐ往て神の櫃を其處より舁上らんとす其櫃ゐケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバの
名をもて呼る 三 すなむち神の櫃を新しき車に載せて山にあるアビナダブの家より舁いだせり 四 アビナダ
ブの子ウザとアヒオ神の櫃を載たる其新車を御しアヒオ櫃のまへにゆけり 五 ダビデおよびイスラエ
ルの全家琴と瑟と鼓と鈴と鐃鈸をもちて力を極め謠を歌ひてエホバのまへに躍踴れり 六 彼等がナコンの
禾場にいたれる時ウザ手を神の櫃に伸してこれを扶へたり其ゐ牛振たればゐり 七 エホバウザゐむかひて
怒りを發し其誤謬のために彼を其處に擊ちたまひければ彼ゐこに神の櫃の傍に死ねり 八 エホバウザを擊

リ 詩百十九〇百廿 路五〇
八九

ヌ 代上十三〇十三
ル 代上十三〇十四

チ 創卅〇二七、三九〇五

ワ 代上十五〇二五
カ 民四〇十五 書三〇三 代
上十五〇二十五
ヨ 王上八〇五 代上十五〇二
六
タ 出十五〇廿 詩卅〇十一
レ 母上二〇十八 代上十五〇
二七
ソ 代上十五〇二九
ツ 代上十五〇二九

子 代上十六〇一

ナ 代上十五〇一 詩百卅二〇
八
ラ 王上八〇五、六二〇六三
ム 王上八〇五五 代上十六〇
二
ウ 代上十六〇三

井 詩卅〇

ノ 士九〇四

オ 母下六〇十四、十六 母上
十九〇二四

ク 母上十三〇十四、十五〇二
八

ちたまひしによりてダビデ怒り其處をペレツウザ(ウザ擊)と呼り其名今日にいたる 九 其日ダビデエホバ
を畏れていひけるゐエホバの櫃いかで我所にいたるべけんやと 十 ダビデエホバの櫃を己に移してダビデ
の城邑にいらゑむるを好まず之を轉してガデ人オベデエドムの家にいたらしむ 十一 エホバの櫃ガデ人オベ
デエドムの家に在ること三月なりきエホバオベデエドムと其全家を惠みたまふ 十二 エホバ神の櫃のために
オベデエドムの家と其所有を惠みたまふといふ事ダビデ王に聞えければダビデゆきて喜樂をもて神の
櫃をオベデエドムの家よりダビデの城邑に舁上れり 十三 エホバの櫃を舁者六歩行たる時ダビデ牛と肥たる
者を獻たり 十四 ダビデ力を極めてエホバの前ゐ踊躍れり時にダビデ布のエポデを着け居たり 十五 ダビデおよ
びイスラエルの全家歡呼と喇叭の聲をもてエホバの櫃を舁のぼれり 十六 神の櫃ダビデの城邑にいりし時サ
ウルの女ミカル窓より覗ひてダビデ王のエホバのまへに舞躍るを見其心ゐダビデを藐視む 十七 人々エホバ
の櫃を舁入てこれをダビデが其爲に張たる天幕の中ゐる其所に置りゑかしてダビデ燔祭と酬恩祭をエホ
バのまへに獻げたり 十八 ダビデ燔祭と酬恩祭を獻ぐることを終し時萬軍のエホバの名を以て民を祝せり
また民の中卽ちイスラエルの衆庶の中に男にも女ゐも俱にパン一箇肉一斤乾葡萄一塊を分ちあたへた
り斯て民皆おの〳〵其家にかへりぬ 二十 爰にダビデ其家族を祝せんとて歸りしかゑサウルの女ミカルダビ
デを出でむかへていひけるゐイスラエルの王今日如何に威光ありしや自ら遊蕩者の其身を露すがごとく
今日其臣僕の嫗女のまへに其身を露したまへりと 二一 ダビデミカルにいふ我ゐエホバのまへに卽ち汝の父
よりもまたろの全家よりも我を選みて我をエホバの民イスラエルの首長に命じたまへるエホバのまへに
躍れり 二二 我ゐ此よりも尙鄙からんまたみづから賤しと思はん汝ゐ語る嫗女等とゑもにありて我ゐ尊榮を

えんと　是故にサウルの女ミカルい死ぬる日まで子あらざりき

第八章

一　王其家に住にいたり且エホバ其四方の敵を壞てかれを安らかあらしめたまひし時　王預言者ナタンに云けるい視よ我い檜の家に住む然ども神の櫃い幔幕の中にあり　ナタン王に云けるいエホバ汝と共に在せば往て凡て汝の心にあるところを爲せ　其夜エホバの言ナタンに臨みていはく　往てわが僕ダビデに言へエホバ斯く言ふ汝わがために我の住むべき家を建んとするや　我いスラエルの子孫をエジプトより導き出せし時より今日にいたるまで家に住しことなくして但天幕と幕屋の中わ步み居たり　我イスラエルの子孫と共わ凡て步める處わて汝ら何故に我わ檜の家を建ざるやとわが命じてわが民イスラエルを牧養ましめしイスラエルの士師の一人に一言も語りしことあるや　然ば汝わが僕ダビデに斯く言ふべし萬軍のエホバ斯く言ふ我汝を牧場より取り羊に隨ふ所より取りてわが民イスラエルの首長となし　汝がすべて往くところにて汝と共わあり汝の諸の敵を汝の前より斷さりて地の上の大なる者の名のごとく汝わ大なる名を得さしめたり　又我わが民イスラエルのために處を定めてかれらを植つけかれらをして自己の處に住て重て動くことなからしめたり　また惡人昔のごとくまたわが民イスラエルの上わ士師を立てたる時よりの如くふたゝび之を惱ますことなかるべし我汝の諸の敵をやぶりて汝を安のならしめたり又エホバ汝に告ぐエホバ汝のために家をたてん　汝の日の滿て汝ら汝の父祖等と共に寢らん時に我汝の身より出る汝の種子を汝の後にたてゝ其國を堅うせん　彼わが名のために家を建ん我永く其國の位を堅うせん　我いかれの父となり彼いわが子となるべし彼もし迷さ我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲さん　されども我の恩惠いわが汝のまへより除きしサウルより離さたるごとくに彼よりい離るゝことあらじ　汝の家と汝の國い汝のまへわ永く保つべし汝の位い永く堅うせらるべし　ナタン凡て是等の言のごとくまたすべてこの異象のごとくダビデに語りければ　ダビデ王入りてエホバの前に坐していひけるは主エホバよ我い誰わが家い何なれば爾此まで我を導きたまひしや　主エホバよ此いなほ汝の目にい小き事なり汝また僕の家の遙か後の事を語りたまへり主エホバよ是は人の法なり　ダビデ此上何を汝に言ふを得ん其い主エホバ汝僕を知たまへばなり　汝の言のためまた汝の心に隨ひて汝此諸の大なることを爲し僕に之をあらしめたまふ　故わ神エホバよ爾い大いなり其い我らが凡て耳に聞る所わ依ば汝の如き者おくまた汝の外に神なければなり　地の何れの國か汝の民イスラエルの如くなる其い神ゆきてかれらを贖ひ己の民となして大なる名を得たまひまた彼らの爲に大なる畏るべき事を爲したまへばあり即ち汝がエジプトより贖ひ取たまひし民の前より國々の人と其諸神を逐拂ひたまへり　汝は汝の民イスラエルをかぎりなく汝の民として汝わ定めたまへりエホバよ汝いかれの神となりたまふ　されば神エホバよ汝の僕と其家につきて語りたまひし言を永く堅うして汝のいひしごとく爲たまへ　ねがはくい永久わ汝の名を崇めて萬軍のエホバいイスラエルの神なりと曰しめたまへねがはくい僕ダビデの家をして汝のまへわ堅く立ましめたまへ　其い萬軍のエホバイスラエルの神よ汝僕の耳に示して我汝わ家をたてんと言たまひたまひたればなり是故に僕此祈禱を汝わ爲す道を心の中に得たり　主エホバよ汝い神なり汝の言は眞なり汝この惠を僕わ語りたまへり　願くい僕の家を祝福て汝のまへに永く續くことを得さしめたまへ其い主エホバ汝これを語りたまへばなりねがはくい汝の祝福によりて僕の家わ永く祝福を蒙らしめたまへ

第八章

一　此後ダビデペリシテ人を擊てこれを服すダビデまたペリシテ人の手よりメテグアンマをとれ

ロ 民二四〇十七　ハ 詩七二〇十　母上十〇二七
ニ 母下六〇十四
ホ 母下十〇六　詩六十〇
ヘ 代上十八〇三　創十五五〇十八
ト 代上十八〇四
チ 代上十八〇四　雲十一〇六、九
ヌ 王上十一〇廿三、二四〇二五
ル 母下八〇二
ヲ 母下八〇十四、七〇九
ワ 王上十〇十六
カ 代上十八〇八
ヨ 代上十八〇九
タ 代上十八〇十
子 創二七〇二九、三七、四十
ナ 母下八〇六
ラ 母下十九〇十三、廿〇廿三
代上十一〇六、十八〇十五
ソ 王下十四〇七
ツ 代上十八〇十二　詩六十
レ 王上七〇五一　代上十八〇十一、二六〇二六
ウ 代上二四〇三

り ダビデまたモアブを擊ち彼らをして地わ伏しめ繩をもてかれらを度れり卽ち二條の繩をもて死す者を度り一條の繩をもて生しおく者を量度るモアブ人い貢物を納てダビデの臣僕となれり　三 ダビデまたレホブの子なるゾバの王ハダデゼルがユフラテ河の邊にて其勢を新わせんとて往るを擊り　四 玄かしてダビデ彼より騎兵千七百人歩兵二萬人を取りまたダビデ一百の車の馬を存して其餘の車馬い皆其筋を切斷り　五 ダマスコのスリア人ゾバの王ハダデゼルを援んとて來りけるゾバ ダビデスリア人二萬二千を殺せり　六 玄かしてダビデダマスコのスリアに代官を置きぬスリア人も貢物を納てダビデの臣僕となれりエホバダビデを凡て其往く所にて助けたまへり　七 ダビデハダデゼルの臣僕等の持る金の楯を奪ひてエルサレムに攜きたる　八 ダビデ王又ハダデゼルの邑ベタとベロタより甚だ多くの銅を取り　九 時にハマテの王トイダビデゲハダデゼルの摠の軍を擊破りしを聞て　十 トイ其子ヨラムをダビデ王につかはし安否を問ひかつ祝を宣しむ其いハダデゼル嘗てトイと戰を爲したるわダビデハダデゼルとたゝかひてこれを擊やぶりたれゞなりヨラム銀の器と金の器と銅の器を攜へ來りけれゞ　十一 ダビデ王其攻め伏せたる諸の國民の中より取りて納めたる金銀と共わ是等をもエホバわ納めたり　十二 卽ちエドムよりモアブよりアンモンの子孫よりペリシテ人よりアマレクよりえたる物およびゾバの王レホブの子ハダデゼルより得たる掠取物とゝもわこれを納めたり　十三 ダビデ鹽谷にてエドム人一萬八千を擊て歸て名譽を得たり　十四 ダビデエドムに代官を置り卽ちエドムの全地わ徧く代官を置てエドム人い皆ダビデの臣僕となれりエホバダビデを凡て其往くところにて助けたまへり　十五 ダビデイスラエルの全地を治め其民わ公道と正義を行ふ　十六 ゼルヤの子ヨアブ軍の長アヒルデの子ヨシヤパテい史官　アヒトブの子ザドクとアビヤタルの子アヒメレクい祭司セラヤい書記官　十八 エホヤダの子ベナヤいケレテ人およびペレテ人の長ダビデの子等い大臣なりき

非 代上十八〇十七
ノ 母上卅〇十四
オ 母下廿〇二六
イ 母上十八〇三、廿〇十四、十五、十六、十七、四二、鐵二七〇十
ロ 母下十六〇一、十九〇十七、二九
ハ 母上廿〇十四
ニ 母下四〇四
ホ 母下十七〇二七
ヘ 代上八〇三四
ト 母下一〇三
チ 母上二四〇十四　母下十六〇九
リ 母下十六〇四、十九〇二九
ヌ 母下九〇七、十二、十三、九〇二八
ル 母下十九〇十七
ヲ 母下九〇七、十
カ 母下九〇三
チ 代上八〇三四
ワ 母下九〇七、十

第九章

一 爰わダビデいひけるいサウルの家の遺存れる者尙あるや我ヨナタンの爲に其人わ恩惠をほどこさんと　二 サウルの家の僕なるゾバと名くる者ありけれゞかれをダビデの許に召きたるに王のれにいひけるい汝いゾバなるか彼い汝僕是なり　三 王いひけるい尙サウルの家の者あるか我其人に神の恩惠をほどこさんとすゾバ王にいひけるいヨナタンの子尙あり跛足なり　四 王かゝにいひけるい其人い何處にをるやゾバ王にいひけるいロデバルにてアンミエルの子マキルの家にをる　五 ダビデ王人を遣してロデバルより卽ちアンミエルの子マキルの家よりこれを攜來らゝむ　六 サウルの子ヨナタンの子なるメピボセテダビデの所わ來り伏て拜せりダビデメピボセテよといひけれゞ答て僕此にありと曰ふ　七 ダビデこれわいひけるい恐るゝ勿かれ我必ず汝の父ヨナタンの爲わ恩惠を汝に志めさん我汝の父サウルの地を悉く汝わ復すべし又汝い恒わ我席わおいて食ふべしと　八 かれ拜して言けるい僕何あれゞか汝死たる犬のごとき我を眷顧たまふ　九 王サウルの僕ゾバを呼てこれにいひけるい凡てサウルとろの家の物い我皆汝の主人の子わあたへたり　十 汝と汝の子等と汝の僕かれのためわ地を耕へして汝の主人の子わ食ふべき食物を取りきたるべし但し汝の主人の子メピボセテい恒わ我席において食ふべしとゾバい十五人の子と二十人の僕あり　十一 ゾバ王わいひけるい總て王わが主の僕に命じたまひしおとく僕なすべしとメピボセテの王の子の一人のごとくダビデの席にて食へり　十二 メピボセテわ一人の若き子あり其名をミカといふゾバの家に住る者い皆メピボセテの僕なりき　十三 メピボセテいエルサレムわ住みたり其いかゝ恒わ王の席わて食ひたれゞなりかれい兩の足ともに跛たる者なり

イ 代上十九〇一

ハ 創三四〇卅　出五〇廿一
　 母上十三〇四
ニ 母下八〇三、五

ロ 繁廿〇四、四七〇二

ホ 士十一〇三、五

ヘ 母下廿三〇八

ト 母下十〇六

チ 申卅一〇六
リ 母上四〇九　哥前十六〇十三

ヌ 母上三〇十八

第十章

一 此後アンモンの子孫の王死て其子ハヌン之ゐ代りて位に即く　二 ダビデ我ナハシの子ハヌンにろの父の我に恩惠を示せしごとく恩惠を示さんとおもひてダビデかをを其父の故によりて慰めんとて其僕を遣せりダビデの僕アンモンの子孫の地にいたるに　三 アンモンの子孫の諸伯其主ハヌンにいひるるハダビデ慰者を汝に遣すしたるによりて彼汝の父を崇むと汝の目に見ゆるやダビデ此城邑を窺ひこれを探りて陷いれんために其僕を汝に遣せるゐあらずや　四 是においてハヌンダビデの僕を執へ其鬚の半を剃り落し其衣服を中より斷て股までおしてこれを歸せり　五 人々これをダビデに告ければダビデ人を遣すしてかれらを迎へしむ其人々大ゐ恥たれば なり卽ち王いふ汝ら鬚の長るまでエリコに止まりて然るのち歸るべしと　六 アンモンの子孫自己のダビデに惡まるゝを見ゑかをアンモンの子孫人を遣すしてベテレホブのスリア人とゾバのスリア人の步兵二萬人ゐよびマアカの王より一千人トブの人より一萬二千人を雇いれたり　七 ダビデ聞てヨアブと勇士の惣軍を遣すせり　八 アンモンの子孫出て門の入口に軍の陣列をなしたりゾバとレホブのスリア人ゐよびトブの人とマアカの人い別に野に居り　九 ヨアブ戰れ前後より己の向ふを見てイスラエルの選拔の兵の中を選みてこれをスリア人に對ひて備へゑめ　十 其餘の民をば其兄弟アビシヤイの手ゐ交してアンモンの子孫に向て備へしめて　十一 いひけるい若スリア人我に手強からば汝我を助けよ若アンモンの子孫汝ゐ手剛からば我ゆきて汝をたすけん　十二 汝勇ましくなれよ我ら民のためとわれらの神の諸邑のために勇しく爲んねがをくいエホバ其目によしと見ゆるところをなしたまへ　十三 ヨアブ己と共ゐ在る民と共にスリア人ゐむかひて戰んとて近づきければスリア人彼のまへより逃たり　十四 アンモンの子孫スリア人の逃たるを見て亦自己等もアビシヤイのまへより逃て城邑にいりぬヨアブすなをちアンモ

ル 代上十九〇十六

チ 代上十九〇十八

リ 母下八〇六

イ 王上廿〇廿二、二六　代下三六〇十
ロ 代上廿〇一

ハ 申廿二〇八
ニ 創三四〇二　伯卅一〇一
太五〇二八
ホ 代上三〇五

ヘ 母下廿三〇三九
ト 詩五十〇　雅一〇十四
チ 利十五〇十九、二八、十八
〇十九

リ 創十八〇四、十九〇二

ンの子孫の所より還りてエルサレムゐいたる　十五 スリア人其イスラエルのまへゐ敗れたるを見て俱ゐあつまれり　十六 ハダデゼル人をやりて河の前岸ゐをるスリア人を將ゐ出して皆ヘラムゐきたらしむハダデゼルの軍の長ショバクかをらを率ゐたり　十七 甚事ダビデゐ聞えければ彼イスラエルを悉く集めてヨルダンを渉りてヘラムに來れりスリア人ダビデに向ひて備へ之と戰ふ　十八 スリア人イスラエルのまへより逃ければダビデスリアの兵車の人七百騎兵四萬を殺し又其軍の長ショバクを擊てこれを其所ゐ死ゑめたり　十九 ハダデゼルの臣なる王等其イスラエルのまへに壞れたるを見てイスラエルと平和をなして之ゐ事へたり斯スリア人い恐れて再びアンモンの子孫を助くることをせざりき

第十一章

一 年歸りて王等の戰に出る時にゐよびてダビデヨアブゐよび自己の臣僕並にイスラエルの全軍を遣すせり彼等アンモンの子孫を滅ぼしてラバを圍めりされどダビデいエルサレムに止もぬ　二 爰に夕暮にダビデ其床より興きいでゝ王の家の屋蓋のうへに步みしが屋蓋より一人の婦人の体をあらふを見たり其婦い觀るに甚だ美し　三 ダビデ人を遣して婦人を探らしめしに或人いふ此いエリアムの女バテシバにてヘテ人ウリヤの妻なるゐあらずやと　四 ダビデ乃ち使者を遣すして其婦を取る婦彼に來りて彼婦と寢たり之かして婦其不潔を淸めて家に歸りぬ　五 かくて婦孕みければ人をつかすしてダビデに告ていひけるい我子を孕めりと　六 是ゐおいてダビデ人をヨアブゐつかはしてヘテ人ウリヤを我ゐ遣はせといひけれをヨアブウリヤをダビデに遣すせり　七 ウリヤダビデにいたりしかをダビデこれにヨアブの如何ゐるると民の如何なると戰爭の如何ゐるを問ふ　八 之かしてダビデウリヤゐいひけるい汝の家に下りて足を洗へとウリヤ王の家を出るゐ王の贈物其後に從ひてきたる　九 然どウリヤい王の家の門ゐ其主の僕等と〻もゐ寢てゐの